

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

タムラサトル 美術家

Satoru Tamura / Artist



CREATOR^{No}
INTERVIEW 138

タムラサトル Satoru Tamura

1972年 栃木県生まれ。1995年 筑波大学 芸術専門学群 総合造形卒業。「まわるワニ」、「後退するクマ」、「登山する山」、「バタバタ音を立てる布」、「端数がない重量の彫刻」、「大袈裟で開放的なスイッチ」、「動き続ける図形もしくは文字」、「10回たたく装置」、「空間を最大限に使用しただけインスタレーション」などを制作・発表している。



No 138 タムラサトル 美術家
SATORU TAMURA / Artist

意味から切り離された、ただそこにあるという神々しさ。

published_2022.06.22 / photo_yoshikuni nakagawa text_koh degawa

ユーモアに満ちていて、コミカルな作風ながらも、意味や文脈から切り離された不思議な作品で見る人の心を動かし、鑑賞者に問いかけるタムラサトルさん。現在、国立新美術館にて代表作「まわるワニ」のカラフルな彫刻を中心とした大規模な個展を開催中です。回転するワニのシリーズの変遷、なぜあえて意味がないものをつくるのか、そしてタムラさんにとってアートとはどんなものなのか、お話を伺いました。

不思議なものを見せられている感覚を生む、回転するワニ。

ワニがまわる作品が生まれたきっかけは、最初は適当というか、偶然というか。大学3年生の時「電気を使った芸術装置」という、今まで一度もやったことのない種類の課題が出て、それで、「次の朝起きた時、頭に思い浮かんだことをやる」というルールだけを決めました。そしたら、目覚めてなぜか「ワニがまわる」と思っちゃったんですね。その理由はもう今となっては辿ることができないので、国立新美術館の展覧会『ワニがまわる』のチラシにも「ワニがまわる理由は、聞かないで欲しい」って書いてあるんです（笑）。



ワニがまわる タムラサトル

開館 15 周年という記念の年に、タムラさんの代表作である「まわるワニ」を中心とした個展を開催。約 12m の大型の「ワニ」など、インスタレーション作品を展開。2022 年 6 月 15 日（水）から 7 月 18 日（月・祝）まで開催。観覧料無料。



スピंकロコダイル

制作：1994 年
サイズ：5,000 x 5,000 x 2,500 mm
素材：ウレタン、鉄、モータ、ゴム、etc
コマバクストラウム
撮影：高田洋三

はじめてワニをまわした時、結構ショックだったんです。自分でつくったにも関わらず、さも最初からそこにあったかのように、すごく不思議なものを見せられている感じがして。その感覚が忘れられなくて、「なんでワニがまわったら面白いんだろう」ということを確認するために膨大な数の作品をつくり続けてきた感じです。



スピंकロコダイル VI

制作：1998 年 (2012 年にレイアウト変更)
サイズ：5,000 x 600 x 1,200 mm
素材：ウレタン、鉄、モータ、ゴム、etc
群馬県立近代美術館
撮影：木暮伸也

動く前から面白かった、12 メートルのワニ。

この展覧会の出品作《スピंकロコダイル・ガーデン》は、作家としてのデビューのきっかけになったシリーズです。これまでずっとワニをつくり続けてきたわけだし、ワニだけで1回勝負してみたいという気持ちがあったんです。今回、国立新美術館で個展を開催することになったのですが、本当はもうちょっと歳をとってからやりたかったんです。「先生、次の展示どうしましょう」「じゃあ、ワニまわそうかな」「ついに集大成ですね！」という感じで。思ったより 10 年いや 20 年早く機会が来ちゃいました（笑）。

国立新美術館のように広い展示空間にはこれくらいなきゃ駄目だろうと、今回は 12 メートルのワニをつくりました。動かしてみたら、デカすぎて思わず笑いました。と言っても、自分のアトリエの庭だから大きく見えたのかもしれない。これが美術館の空間で見るとどうなるか心配な気持ちもあります。さらに、1,000 匹の小ワニもつくりました。1,000 個もの作品をつくるのははじめてなので、筋肉が鍛えられましたね。

電源を入れる瞬間に、作品になるかがわかる。

何ヶ月もの時間とお金をかけて制作したものが作品として成立するかどうかは、作品の電源を入れる瞬間に決まります。完成形の状態で想像できることもあるけれど、それまでは面白いのかどうかまったくわからない。動く瞬間にはじめて、作品になるかが判断できる。だから昔は、電源を入れようとする度、手が震えました。

作品になるか、ならないかの境界線にはいくつかの要素があるんです。ワニの作品の場合は、スピードです。最初の頃は、スピードが持つ凶暴性を求めて、ワニを2秒で1回転させていました。それから作品ごとに、スピードを調整しながら速くして行って、どの時点から作品として成立するのか、実験していました。

そんな時、ある人から「絶対ゆっくりのほうがいいよ」とアドバイスをもらったことがあって、「いやいや、そんなことないって」と試しに遅くしてみたら、心から「いいな」と思えた瞬間があったんです。ここ何年かは、ゆっくり動いても納得できる自分がいます。昔はあんなに重要だと思っていたスピードですが、今は掌を返すようにゆっくりでも大丈夫になって、どういうことなんだろうと思います。ワニがまわっているということのバカバカしさの中にある魅力に、我ながらあらためて気づいたのかもしれない。

そのあとに制作した《TOKYO マシン》は、動力を伝達するチェーンで文字を表現した作品ですが、構造がより複雑になっています。モータのスペックなどの問題で、そもそも動かない可能性が大いにある。だからこの作品の場合は、まずは動くかどうか作品として成立する要素で、動いているだけでラッキー、と思えるんです。



TOKYO マシン

制作：2021 年

サイズ：1,020 x 3,900 x 600 mm

素材：ガラス、鉄、チェーン、ベアリング、モーター 他

銀座 蔦屋書店

画像提供：MAKI Gallery



タムラサトル 美術家
SATORU TAMURA / Artist

published_2022.06.22 / photo_yoshikuni nakagawa text_koh degawa

「思わず手が震えるような瞬間をまた味わいたい」がモチベーション。

僕は憑依型というか、つくるべきものが頭の中であって、次はあれ、その次はあれ、と一つずつ具現化していくタイプの作家です。そうやってきたから、だんだん、「次にどうしたいか」がなくなってきた感じもあります。

『ワニがまわる』展の企画で、漫画家の吉田戦車さんと対談させていただいた時に、『伝染るんです。』を描いた当時のことを聞いてみたんです。そしたら、「あの時は誰かに描かされているような気分だった」と仰っていて、僕と同じような感覚を持っているんだな、と感じました。



伝染るんです。

1989 年より連載を開始した吉田戦車による4コマ漫画。不条理ギャグ漫画のジャンルを確立したとされ、ゲーム、アニメ、実写作品にも展開された。累計発行部数 300 万部以上。

誰かにつくらされている、もしくは何かが「降りてくる」ような感覚は、求めても得られるものではないのも事実です。「あそこに行ったら、ああなるかな」と思っているだけではならなかったり、逆にふとした時に何かを思いついたり。以前、山をテーマに作品をつくったことがあるのですが、その時はワーッとアイデアが浮かんできました。山がどうなったら一番山っぽくなるかを考えて、「" 一番登山しなさそうなもの=山 " そのものを登山させよう」とひらめいた。そうすると、ここがチェーンで、ここにスイッチがあって と構造が一気に頭に浮かび、そこから先はプラモデルのような世界。無心にパーツを組み合わせていくのは、とても気持ちよかったです。

何かに突き動かされる感覚や、期待で手が震えるようなあの感覚をまた味わいたいというのが、今も制作のモチベーションになっています。



Double Mountain

制作：2001 年

サイズ：12,000 x 3,000 x 1,700 mm

素材：ウレタン、鉄、モータ、ゴム、etc

ギャラリー アート倉庫

タムラサトル 美術家

SATORU TAMURA / Artist



published_2022.06.22 / photo_yoshikuni nakagawa text_koh degawa

課題違反ギリギリを攻めていく。

作家になるきっかけを得たのは高校生の時。当時から訳のわからないものや変なことをするのが好きで、課題があると違反ギリギリを攻めていたんです。中学では「変なことやりやがって」という反応だった先生からも、高校になるとちょっといい反応がもらえるようになったことも大きかったですね。

高校までは、絵を描くことにもまったく興味がありませんでした。現代美術のことは「変なことをやっているジャンルがある」と思っていて、本をめくるたびに「こんなのやっていいんだ」とショックを受けていました。「何これ。ビデオ彫刻って、そんなのいいの？」という感じで。そういうのを見て「俺これだったらやっていける」、「これなら負けない」と変な自信があったのかもしれない。

中でも最初に強烈な印象が残っているのはロバート・ラウシェンバーグ。当時、美術の教科書の表紙が何かになっていたのが覚えているのですが、コンバイン・ペインティングという、ペインティングの上にヤギの剥製が乗っている作品でした。「ずるいじゃんこんなの」というのと同時に、「俺こういうの得意だわ」と思ったのを覚えています。



ロバート・ラウシェンバーグ

ネオダダを代表するアメリカ人アーティスト。二次元と三次元の素材をミックスさせ、絵画や彫刻といったジャンルを超えたコンバイン作品を制作した。

画像：Robert Rauschenberg Foundation

意味や目的から切り離されると、真実に近くなる。

僕の作品は、モチーフから意味や目的を切り離して、ただ動くことを見せています。青臭いことを言うようですが、その方が真実に近いと思うからです。ただそこにあるだけのものって、何かすごく神々しい感じがするんです。

それは、赤瀬川原平のトマソンのなものなのかもしれない。例えば、何にも繋がっていない、電線がすべて取られてただ荒野に立っている電柱に、僕は神々しさを感じるんです。かつては何かに使われていたのだろうけれど、今はただそこにあるだけ。これから朽ちていくんだろうっていうものができたらいい。ワニがまわる作品も少しコミカルな感じですが、見る人が「なんなの？」って思ってくれたらいい。



トマソン

赤瀬川原平などが提案した芸術の概念。途中で途切れでしまい機能を果たしていない階段など、無用の長物となった建築物の一部のことを指す。フィールドワーク的に街を観察する実践は、後に「路上観察学」へと繋がっていく。



タムラサトル 美術家
SATORU TAMURA / Artist

published_2022.06.22 / photo_yoshikuni nakagawa text_koh degawa

2014 年頃、久しぶりに「まわるワニ」を展示した時、大学の友だちに「これ、全然古くならないね」と言ってもらったことがあって。2人で「なぜだろう」と考えました。結果、おそらく意味や文脈から切り離されていることで、語りづらく、評価しづらくなるからではないかという答えにたどり着きました。

豊洲にある石川島播磨重工の乗船所跡地の展示では、本来おもりとしての機能を持つ錨に穴を開けて軽量化し、軽い錨をつくったんです。作品名はずばり《ライトアンカー》。これは、意味を反転することで「ハマったな」と感じたパブリックアート。こんな風に具体的なお題があると、その文脈を解体するのが楽しいですね。



ライトアンカー

制作年：2014

素材：産業遺構, 粉体塗装

豊洲フォレシア

画像提供：TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE

リバプールで見た「とんでもない作品」を六本木で。

コロナの前、アートフェアや展覧会で地球を2周くらいしました。マイアミ、バーゼル、香港と様々な街を訪れたのですが、リバプールで偶然ものすごい作品に遭遇したんです。街中で、廃墟のビルの一部が円形にくり抜かれて回転するというとんでもない作品。立ちくらみがるほどのショックを受けました。作品をつくったのはリチャード・ウィルソンで、実際のビルの一部が本当に動くんです。



Turning the Place Over (場の回転)

イギリス人アーティスト、リチャード・ウィルソンによる作品。廃墟ビルの2層分をくり抜き、360度回転させた。2008年第5回リバプール・ビエンナーレに出品され、2011年まで展示された。

©Richard Wilson

取り壊される予定のビルを用いた作品で、下には普通に通行人がいたりするんです。ビルを丸く切る技術、壁面を回転させる技術。「こんなこと許されるんだ」と、すべてが謎で衝撃的でした。

六本木を舞台に何かするとしたら、このくらいのをやりたいですね。日本でキネティックな作品を制作する場合、安全性を考えたら屋内で、となりますが、海外ではある程度のレベルの作家になるとこういう無茶苦茶なことをやるので、その攻めの姿勢は見習わなくちゃいけないと思います。これくらいスケールの大きい作品をつくったら、電源を入れる時、手が震える と言うより、失神しちゃうかもしれない。もう、ボタンを押さないで帰っちゃうかもしれません（笑）。想像しただけでもドキドキしてしまいます。

撮影場所：『ワニがまわる タムラサトル』（会場：国立新美術館 企画展示室 1E、会期：2022年6月15日～7月18日）

取材を終えて

カラフルで巨大なワニがまわる、ギリギリと音を立ててマシーンが動く。タムラサトルさんの作品を見ていると、子どもの頃に水を上からこぼして遊んでいた時のような、あるいはただ広い海を目の前にした時のような気持ちの良い思考停止状態に陥る感覚があります。「鑑賞者として、これで合っているのか」と思っていたこともあったけれど、意味や文脈から切り離されてただそこにあるものへの眼差しは、こういうものなのかもしれないな、とお話を聞いていてずっと腹に落ちるものがありました。(text_koh degawa)